

トポフィリアの生成要素を取り入れた住宅改修の提案 A proposal of house renovation with the concept of topophilia

10923007 徳江 可那子
主査 篠原 聡子 教授
副査 鈴木 賢次 教授
副査 定行 まり子 教授

トポフィリア 記憶 地域性 住宅改修 高齢者住宅
topophilia, memory, regionality, house renovation, house of the aged

第一章 序論

1-1 研究の背景

近代以前の日本において、建築と人の心との結びつきは、信仰という人々の感情に支えられていた。それらは、科学的な合理性を持ち得ないが、人々の心を満たす重要な要素であった。

それらの精神的な空間は、ごく身近な居住空間にも多く作られてきた。例えば、古くからその土地に暮らす群馬県の農家は敷地に屋敷稲荷を持ち、また屋敷内には神棚や仏壇が置かれている。それらの空間は、具体的な機能を持たないが、その家や土地の記憶の象徴であり、心の拠り所にもなっている。

現代の日本の住宅において、このような精神的空間を認めることは難しいように感じられる。商業主義的な発想から生まれた建売住宅や、南側開口という簡易なキャッチフレーズの住宅、特定のコミュニティを持たず容易に住み替えが可能な賃貸住宅、これらの現象は、結果としてかつて空間が持っていた想像性を失わせてしまったとも考えられる。それは、人々に生活の便利さや、新しいライフスタイルをもたらす一方で、心に満ちる根源的な不安や寂しさを助長させ、大きな孤独感をもたらす結果となったのではないだろうか。

かつての日本のような、信仰や地域のコミュニティといったものに頼ることが難しくなっている現代において、建築と人の心の結びつきを取り戻すために注目されるのが、トポフィリアである。人は身近な人の遺品や、思い出の場などを特別に大切にす。このような愛着は、心の投影によって生み出されており、これらの人と物との情緒的な結びつ

きのことを、アメリカの現象学的地理学者イーサー・トゥアンは「トポフィリア」と名付けた。この概念は、現代における人と建築との情緒的な問題を解決する糸口になるのではないかと考えられる。

1-1 研究の目的と構成

1-2-1 研究の目的

本研究では、人の心が投影された建築の顕著な例として、建築家の自邸に着目した。自邸の研究を通して、トポフィリアが建築形態にどのように反映しているのかを明らかにし、人と情緒的に結びついた建築空間を提案することを目的としている。研究から得た空間の構成概念は住宅の計画手法として取り入れ、最終制作物に展開する。

1-2-2 研究の構成

第一章で研究の背景と目的を述べ、第二章ではトポフィリアの定義を行った上で、事例調査を行い、トポフィリアの生成条件を明らかにする。なお第二章には、林昌二・雅子自邸「私たちの家」のヒアリング調査が含まれる。第三章では、設計敷地の分析を行い、第四章にて設計プログラムと作品提案を行う。

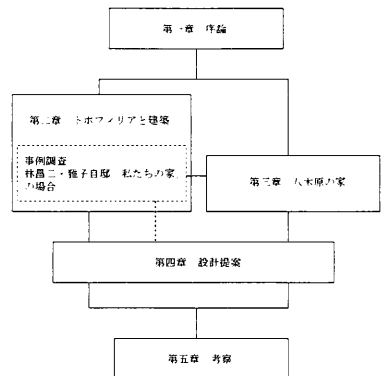


図1 研究フロー

第二章 トポフィリアと建築

2-1 トポフィリアの定義

フランスの哲学者ガストン・バシュラールは、『空間の詩学』において、「幸福な空間のイメージ」の概念を「トポフィリ(場所への愛)」と名付けた。バシュラールは、これまで定義されることのなかった、空間と人との情緒的な関係性を、初めて言語化した。アメリカの現象学的地理学者イーファー・トゥアンは、バシュラールの「トポフィリ」を英語化し、さらに「人々と場所あるいは環境との間の情緒的な結びつき」という意味合いを含め、「トポフィリア」として再定義した。

本研究におけるトポフィリアは、トゥアンによる「人々と場所あるいは環境との間の情緒的な結びつき」の定義を用い、これに加え、「人と建築空間との情緒的な結びつき」もトポフィリアに含めるものとして考える。

2-2 トポフィリアの性質

2-2-1 トポフィリアの生成

イーファー・トゥアンは、『トポフィリア - 人間と環境』において、トポフィリアの生成には以下の二つのパターンがあることを示している。ひとつは「人が環境や場所に人格を投影した場合」、もうひとつは「環境や場所が人に感覚的な刺激をもたらした場合」である。

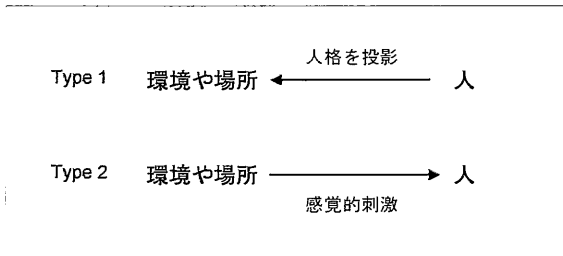


図2 トポフィリアの生成パターン

Type 1「人が環境や場所に人格を投影する場合」

生成条件として「個人的な思い出があるもの」に対して「一定期間以上の親しい関わりがある」が必要である。使用頻度の高い物や場所、あるいは使用時間の長い物や場所には、Type1のトポフィリアが生成されやすい。

Type 2「環境や場所が人に感覚的刺激を与える場合」

生成条件として、対象者にとっての「安全」「想像」または、その両方のイメージを満たす場所に出会うことが必要である。

2-2-2 トポフィリアの表現

1 トポフィリアの芸術的表現

トポフィリアは、本質的に目に見えないものであるが、多くの芸術家たちによってその表現が試みられてきた。そこで表現方法が比較的自由である詩と、視覚的表現がなされている絵画に着目し、芸術表現におけるトポフィリアの性質と特徴を明らかにした。

a. 詩における事例「宮沢賢治」

詩人で童話作家の宮沢賢治(1896-1933)は、故郷である岩手県を愛し、イーハトヴと名付けた。イーハトヴは岩手県の理想化された姿であり、彼の詩や童話の舞台となっている。

イーハトヴとは一つの地名である。強て、その地点を求むるならば、大小クラウドたちの耕していた、野原や、少女アリスが辿った鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠の遙かな北東、イヴン王国の遠い東と考えられる。実にこれは、著者の心象中に、この様な状景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である。

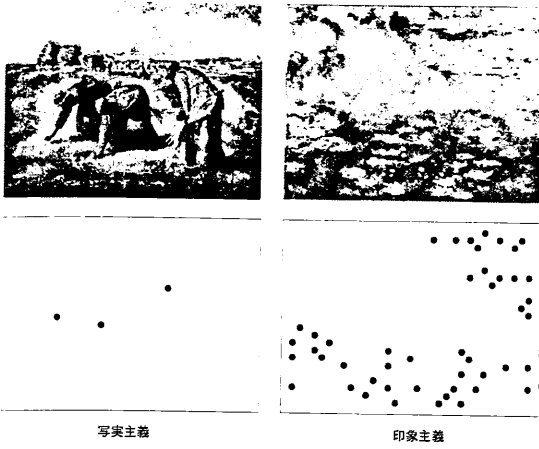
(『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』広告)

宮沢賢治はトポフィリアを瞬間的で可変的なものと捉え、それらをできるだけ自分が感じ取ったまま正確に、繰り返し写し取っていたことが分かった。感じるということは、きわめて曖昧であるため、それは多くの場合全体として捉えられ、すべての対象は等価になるという特徴を持っていた。

b. 絵画における事例「クロード・モネ」

絵画の分野において、記録的な写実主義からイメージそのものの表現へと向かったのが、印象主義である。印象主義は、絵画においてトポフィリアを初めて可視化した事例として重要である。

モネを含めた印象派の絵画において特徴的なのは、焦点の喪失である。写実主義の絵画は、描く対象が決められており、絵画の中にヒエラルキーが存在しているが、印象派の絵画は対象にヒエラルキーが存在しない。そのため焦点が定まらず、イメージが全体として捉えられていた。トポフィリアも瞬間的で可変的なものとして捉えられていたため、時間や季節によって、何度も繰り返し表現がなされていた。



写実主義

印象主義

図3 写実主義と印象主義の焦点比較

2 トポフィリアの建築的表現

建築家による自邸は、トゥアンの指摘する Type1「人が環境や場所に人格を投影する場合」のトポフィリア生成の条件を満たしている。そこで今回は、メキシコの建築家ルイス・バラガン設計した「バラガン邸」、と、日本の建築家伊東豊雄が設計した「中野本町の家」を事例として選定した。中野本町の家は伊東の姉家族のための家であるが、自邸の延長として扱った。

a.「バラガン邸」ルイス・バラガン

ルイス・バラガンは自らの建築を自伝的作品と呼び、「私の家は、私の心の避難場所でした」と語っている。この自邸は長い時間をかけて極端な記憶が取り除かれた、穏やかで幸福なイメージの象徴と考えられる。

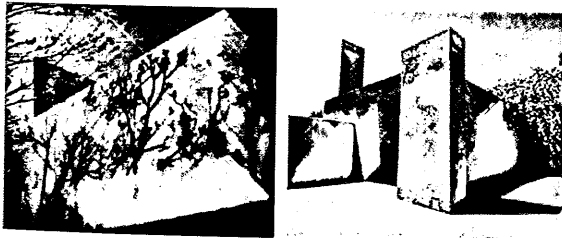


図4 色と構造に見られる過去との連続性

バラガン邸の設計において重要な要素は「過去への認識」であった。バラガンは、過去の記憶を、長い時間をかけて穏やかなイメージへと精錬し、それを基盤として空間を作成した。この過去への認識は、個人的なことだけでなく、地域や国といった単位でも取り入れられており、それらがもたらす普遍性が幸福な空間として認識されていることが分かった。

b.「中野本町の家」伊東豊雄

中野本町を家の設計において重要になるのは「抽象性」と「過去の喪失」である。中野本町の家は、ある一時期に突然訪れた、強い感情(悲しみ)を基盤として設計がなされている。この感情は、長い年月をかけて精錬されたものではないため、過去やその拠り所を持たない。20年後に取り壊されてしまったという経緯からも、このように現実的な場所や時間との接点を持たない空間は、幸福な空間としては認知されなかったということが分かった。

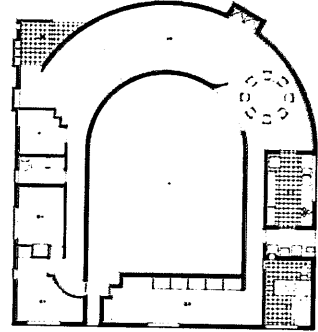


図5 中野本町の家平面図

3 芸術と建築におけるトポフィリア表現の違い

トポフィリアは、芸術と建築で表現方法に違いが見られた。芸術表現におけるトポフィリアは「瞬間的」な要素が重視されていたのに対し、建築表現では「過去(蓄積)」の要素が重視されていた。

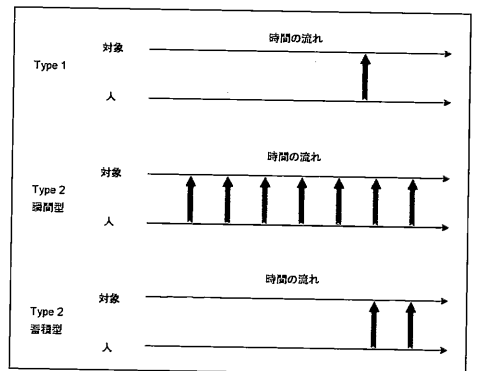


図6 トポフィリアの概念図

Type1 自分の所有物や地域性を持つものなど、過去を持つ要素が表現に適用される。

Type2 対象からの感覚的刺激を全体的なイメージとして繰り返し表現する「瞬間型」。幼少期など過去に受けた感覚的刺激が、時間をかけて精錬され、具体的なイメージとして表れる「蓄積型」の2タイプがある。

2-3 林昌二・雅子自邸「私たちの家」

2-3-1 調査目的

建築家自邸の実態調査と居住者へのヒアリングによって、トポフィリアの生成過程と、建築形態に及ぼす影響を明らかにする。

2-3-2 調査対象

2-3-2-1 事例選定理由

調査対象として、建築家林昌二・雅子氏の自邸「私たちの家」を選定した。「私たちの家」は第Ⅰ期と第Ⅱ期が存在し、第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけては増築を行なっている。増築の際は、これまでの居住空間を可能な限り残しており、建築形態への強い思い入れが認められた。よって、調査対象として有効であると判断した。

2-3-2-2「私たちの家」概要

「私たちの家」は、東京都文京区に建てられた建築家林昌二・雅子氏の自邸である。戦後1955年に、林夫婦と母三人の住まいとして第Ⅰ期が設計された。その20年後の1978年に、来客の増加に伴う居間拡張と、本の収納場所を確保する目的で、増築が行われた。

表1 「私たちの家」建築概要

	私たちの家Ⅰ	私たちの家Ⅱ
居住期間(年)	1955-1977	1978-現在
敷地面積(m ²)	330	369
建築面積(m ²)	63	143
延床面積(m ²)	58	238
構造	CB+RC	CB+RC+W
居住者	夫婦+母	夫婦(2001~夫のみ)

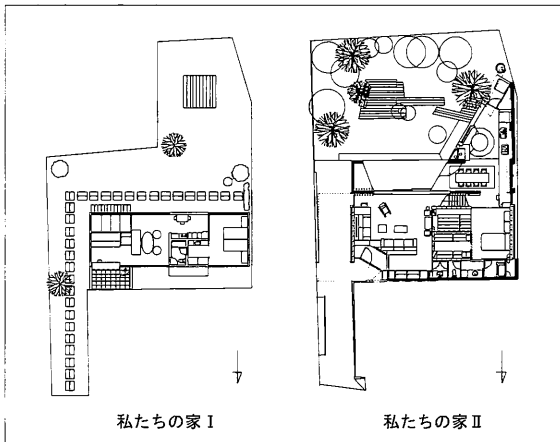


図7 「私たちの家」平面図

2-3-3 調査概要

「私たちの家」設計者で現居住者の林昌二氏に、4回のヒアリング調査を行った。ヒアリング調査では、林氏の各年代における居住場所、およびその周辺環境に対する印象を聞き取った。

表2 調査概要

日時	調査	内容
7月6日	ヒアリング調査 実態調査	幼少期の生活と周辺の印象
7月22日	ヒアリング調査	私たちの家Ⅰの設計時の印象と生活実態
8月20日	ヒアリング調査	私たちの家Ⅱの設計時の印象と生活実態
9月29日	ヒアリング調査 実態調査	自邸の中で居心地のいい空間

2-3-3 調査結果

Type1「人が環境や場所に人格を投影する場合」のトポフィリア

Type1のトポフィリア生成条件である「個人的な思い出のある物や場所に、一定期間以上親しく関わる」を満たすものとして、以下のような3つの事例が見られた。

増築の際にそのまま維持されたもの

増築の際に壊さずにそのまま維持されていたものは、構造体の一部、建具の一部、ベッド、書籍であった。

自らデザインしたもの

自らデザインしたものは、第Ⅰ期では作業机のみ。第Ⅱ期では居間の家具、食堂のテーブル、カウチの机とソファ、二階の書斎机であった。

地域性が見られるもの

外部空間との連続性、内部空間の連続性については「日本家屋での生活経験」、回遊性については「利便性や安心感」、床座では「日本人の感覚に素直になった結果」のようにそれぞれの要素が影響していた。

Type2「環境や場所が人に感覚的刺激を与える場合」のトポフィリア

Type2のトポフィリア生成条件である「イメージを満たす場所との出会い」を明らかにするため、自邸設計前の期間で印象に残っていた記憶をまとめた。幼少期では「安心 / 心地いい」や「非日常 / 強烈」といった記憶が印象に残っており、年齢が重なるごとに「憧れ」や「楽しい / 面白い」といった記憶が出現してきていることが分かった。

表 3 設計前の記憶

年齢	記憶	印象							
		安心/心地 いい	非日常/強 烈	楽しい/面白 い	憧れ	親しみ	印象なし	不快	秘密
0-6歳	a 生家の思い出						○		
	b 電車制作						○		
	c 近所の家に入出入り	○							○
	d 戦前の平和な雰囲気	○							
	e テニスの音		○						
7-12歳	f デパート			○					
	g お餅つきの会			○					
13-15歳	h 隠れ家のイメージ	○	○		○				
	i ライトプレーン			○	○				
16-20歳	j 戦争		○					○	
	k 寮生活		○	○					
	l 放浪		○						
21-25歳	m 住宅設計			○					

表 4 設計後の記憶

対象	記憶	印象							
		安心/心地 いい	非日常/強 烈	楽しい/面白 い	憧れ	親しみ	印象なし	不快	秘密
第Ⅰ期	a 寝室	○							
	b カウチ	○			○	○			
第Ⅱ期	c 寝室	○							
	d 屋根裏		○		○				

設計後の自邸において、特に思い入れがある空間は、第Ⅰ期では寝室のみだった。第Ⅱ期においては、寝室に加え、カウチ、屋根裏が思い入れのある空間として挙げられた。思い入れがある空間は「安心 / 心地いい」といった印象を持つものが特に多く見られた。第Ⅱ期ではそれらに加え、「非日常 / 強烈」「憧れ」「親しみ」を持つ空間も挙げられていた。

生活実態

ヒアリング調査から、第Ⅰ期と第Ⅱ期の生活実態を把握した。第Ⅰ期では、どの場所も滞在時間は均等であった。利用頻度としては、予備空間以外は毎日使用されており、無駄な空間はほとんど無かったことが分かった。第Ⅱ期では屋根裏部屋の滞在時間が特に長くなっていた。利用頻度としては、生活必需空間、寝室、カウチは毎日、来客用空間であった食堂と居間がそれに続き、屋根裏部屋と予備空間の利用頻度は極端に少なくなっていた。

2-3-4 考察

利用頻度が高い場所や、利用時間の長い場所には type1 のトポフィリアが生成されやすいことが分かった。第Ⅰ期ではすべての空間の利用頻度の高さが愛着へとつながっていた。第Ⅱ期では利用頻度の高い場所や利用

時間の長い場所には、自分でデザインした家具が置かれており、それらが心理的な安心感をもたらしていることが分かった。

原体験の印象と、自邸の中で印象に残っている空間のイメージは一致しており、そのイメージは Type2 のトポフィリアの生成につながる事が分かった。林氏は理想的な居場所のイメージとして「架空の隠れ家」を挙げており、その特徴を「自分は隠れていて安全だが、全体のことはよく見える」と語っている。そのイメージは、カウチと屋根裏部屋といった、二つの空間として実現されていた。

私たちの家は、複数のトポフィリアの生成によって、多層的な安心感をもたらす空間となっていた。しかし、それによって家そのものが強い求心性を獲得しており、結果として地域との関連はあまり見られなかった。

2-4 幸福な空間

2-4-1 幸福な空間の定義

個人の記憶や経験というものを反映し、それに加えて周辺の時間や地域というものを受け止め、時の流れとともに様々な人に愛着を持たれ続けていくような空間は、個人をこえて、多くの人々にとって大切な空間である。このような空間を、ガストン・バシュラールの言葉から引用し、「幸福な空間」と定義した。

2-4-2 幸福な空間の構成要素

空間の構成要素として、トポフィリアの中でも「安らかさ」を誘発する可能性の高い、Type1 と Type2「蓄積型」のトポフィリアが適用された空間とする。

Type 1

地域性を反映したもの その地域の歴史や伝統の時間が含まれたもの

所有物 自分と対象とのあいだに時間の蓄積があるもの

自らデザインしたもの 自らデザインしたもの

Type 2

心理的イメージの投影 過去印象に残ったイメージが、時間をかけて蓄積したもの

第三章 八木原の家

3-1 調査目的

設計敷地である「八木原の家」において、トポフィリア生成のために、現状において満たしている条件と不足している条件を、実態調査と居住者へのヒアリングから明らかにする。

3-2 調査対象

「八木原の家」は、群馬県渋川市にある、一般的な養蚕農家である。現在 82 歳の M 氏がひとりで生活している。敷地内には、7 棟の建物があり、それぞれ新築や増築を行っている。



図 8 「八木原の家」配置図

3-3 調査概要

現居住者の M 氏に 4 回のヒアリング調査を行った。また、それに加え、実測調査を行った。ヒアリング調査では、M 氏の各年代における居住場所、およびその周辺環境に対する印象を聞き取った。

表 5 調査概要

日時	調査	内容
8月7日	ヒアリング調査 実測調査	幼少期の生活と周辺の印象
8月8日	ヒアリング調査 実測調査	八木原の家初期の印象と生活実態
8月9日	ヒアリング調査 実測調査	八木原の家後期の印象と生活実態
9月4日	ヒアリング調査 実態調査	現在の暮らし方

3-4 調査結果

Type1「人が環境や場所に人格を投影する場合」のトポフィリア

Type1 のトポフィリアの生成条件を満たすものとして、「八木原の家」における建具と家具、およびインテリアの現状を把握した。建具については、老朽化による取り替えを繰り返しているため、年代にばらつきがみられた。家具についてはナンドに置かれているものが年代的に古く、思い入れも強いようだった。装飾品については、友人や親族から送られたものが多かった。

表 6 インテリア概要

	種類	個数	サイズ	設置場所
建具	① 障子	4枚	900×1750×30	ザシキ
	② 障子	4枚	920×1750×30	ザシキ
	③ 障子	4枚	920×1750×30	デイ
	④ 板張	4枚	950×1750×30	ザシキ
	⑤ ふすま	2枚	900×1650×30	デイ
	⑥ ふすま	4枚	920×1750×30	デイ
	⑦ ふすま	2枚	900×1750×30	ナンド
	⑧ 板張	2枚	900×1300×30	ナンド
	⑨ ふすま	2枚	920×1750×30	ナンド
	⑩ 板張	4枚	920×1750×30	イマ
	⑪ 障子	4枚	900×1750×30	イマ
家具	① 化粧鏡	1個	300×600×1300	ザシキ
	② 棚	1個	1300×300×1500	ザシキ
	③ 仏壇	1個	700×550×1500	イマ
	④ テレビ	1個	700×80×400	イマ
	⑤ 小ダンス	1個	600×400×400	イマ
	⑥ マッサージチェア	1台	700×1200×1400	デイ
	⑦ 衣装箱	1個	900×530×1700	ナンド
	⑧ 衣装箱	1個	900×530×1700	ナンド
	⑨ ベビーダンス	1個	860×430×1400	ナンド
	⑩ 大ダンス	1個	400×900×1500	ナンド
	⑪ 飾り棚	1個	300×900×1700	ナンド
	⑫ 畳ベッド	1個	1960×900×400	ナンド
装飾品	① 絵	1枚		ザシキ
	② つるし雛	4個		ザシキ
	③ 孫の絵	1枚		ザシキ
	④ 先祖写真	2枚		デイ
	⑤ 掛け軸	3個		デイ

表 7 印象的な記憶

	記憶		印象										
			安心/心地 いい	非日常/強 烈	楽しい/面白 い	憧れ	親しみ	印象なし	不快	綺麗	心の支え		
0-6歳	a	お寺											
7-12歳	b	農業の手伝い							○				
	c	通学								○			
	d	縁日			○								
	e	小倉百人一首			○								
	f	兄											
	g	生家のデイ								○			
13-20歳	h	生家の隠居屋								○			
	i	生家の屋敷稻荷								○			
	j	開墾の風景		○									○
	k	演芸会		○	○								
	l	高崎に見に行った映画			○								
m	戦時中												
21-60歳	n	八木原での農作業								○			
	o	納戸									○		
	p	お客に行く	○		○								
	q	婦人会											
r	飼育所			○				○					
その他	s	雨			○								
	t	八木原の屋敷稻荷			○								
	u	四季											○
	v	友人と旅	○		○							○	
	w	花を育てる					○						

Type2「環境や場所が人に感覚的刺激を与える場合」のトポフィリア

Type2のトポフィリア生成条件である「イメージを満たす場所との出会い」を明らかにするため、印象に残っていた記憶をまとめた。全体に「楽しい / 面白い」といった記憶が多く、M氏独自のものとして「心の支え」という項目があった。家に関する印象は少なく、四季に関することや、友人とのエピソードなど、外部環境に関する記憶が多い傾向がみられた。

生活実態

生活空間は、イマとナンドに集中しており、他の空間はほとんど使用されていないことが分かった。特にデイとザシキは、床面積が多い割に利用頻度が低く、改善が必要であることが分かった。

3-5 考察

Type1のトポフィリアの生成については、利用頻度の高いイマとナンドに置かれている家具に対して思い入れが強いということが分かった。Type2のトポフィリアについては、自然環境や、人と会うといった外部環境に比較的良い印象を持っていることが分かった。また稲荷に参拝するといった独自の習慣が見られた。

第四章 設計提案

4-1 コンセプト

所有物への自己投影や、幼少期の記憶など、人は自分が愛着を持つものに、必ず過去につながる要素を求め、発見していることが、これまでの調査より明らかになった。また、それぞれの記憶や物の持つ蓄積された時間は、一元的なものではなく、多様なベクトルを持っていた。

今回の設計において建築は、記憶や物を受け止めるための受容装置として機能し、時間の蓄積を持つ記憶や所有物の存在に大きく頼りながら、空間そのものを生み出せるよう計画を行った。

4-2 デザインプロセス

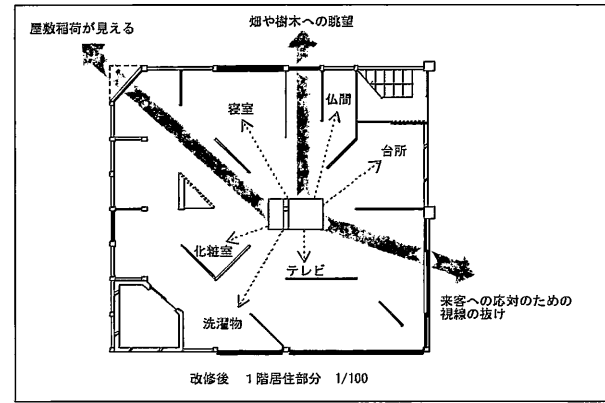
トポフィリアの生成された「幸福な空間」の成立条件である以下の四つの要素を満たすよう、改修を行った。①はType2、②③④はType1のトポフィリアの生成に対応している。

- ①心理的イメージの投影
- ②地域性を反映したものがある
- ③所有物がある
- ④自らデザインしたものがある

それぞれのデザインの詳細を以下に示す。

①心理的イメージの投影

M氏の記憶の中で、特に良い印象と結びついていた「四季を感じる」「友人と会う」と、「屋敷稲荷に参拝する」という習慣を、ひとつの空間にいて実現できるよう、コタツを中心とした放射状のプランとした。



改修後 1階居住部分 1/100

図9 放射状プラン

②地域性を反映したもの

母屋の空間は、ほとんどが建具によって仕切られていた。このような構成は、八木原周辺の農家では一般的なことである。そこで、現在使用されている建具を改修後も使用することとした。

③所有物

現在の母屋は収納が少なく、そのため箆笥や物入れなどの家具が多く使用されている。それらは、嫁入り道具など思い入れの強いものも多く見受けられた。そのため、既存の家具はすべて、継続して使用できるようにした。

④自らデザインしたもの

プランの中心となる居間空間のコタツを、M氏と共同でデザインした。現在の生活スタイルを維持し、来客の際は大きく使えるよう配慮した。

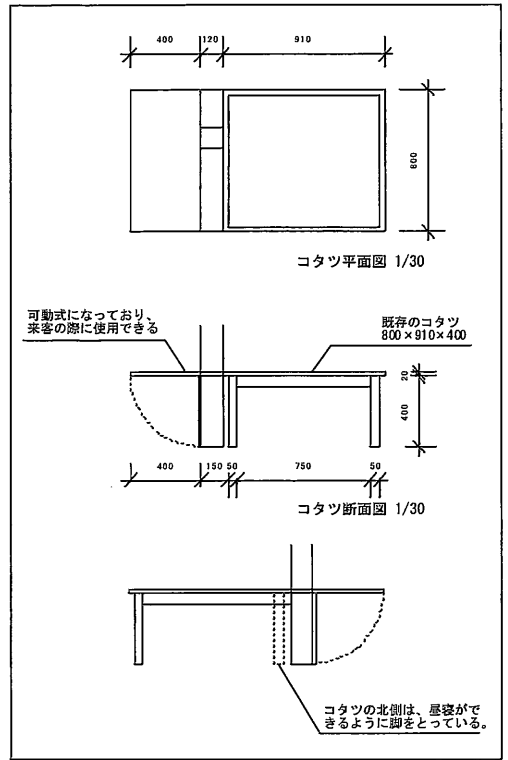


図11 コタツのデザイン

参考文献

- イーファー・トッパン:トポフィリア せりか書房 1992年
- 林昌二:私の住居・論 丸善 1981年

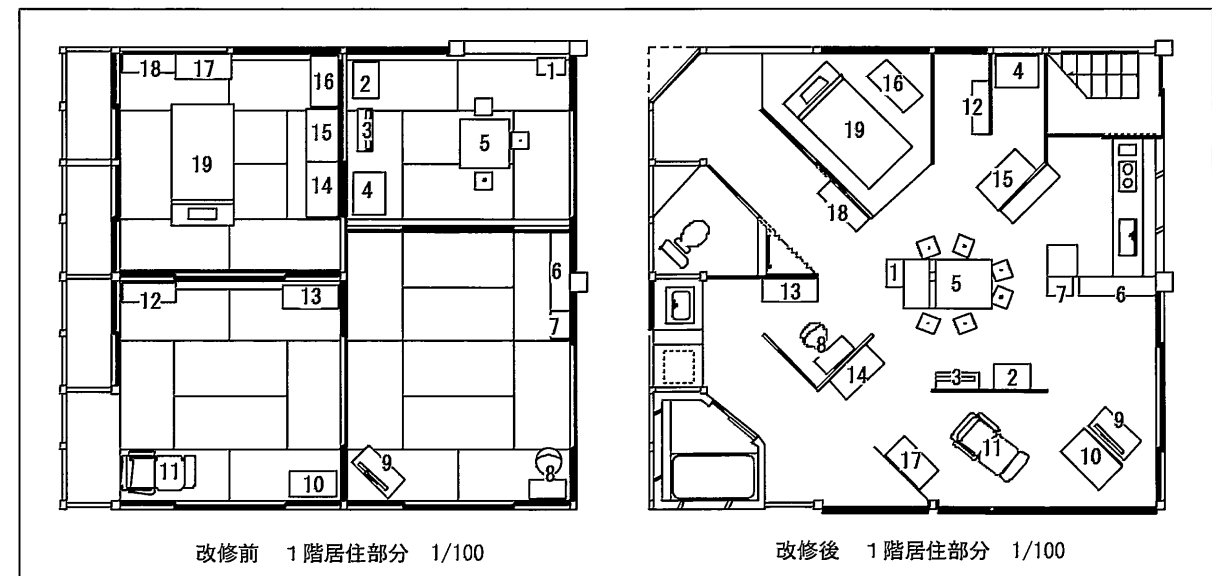
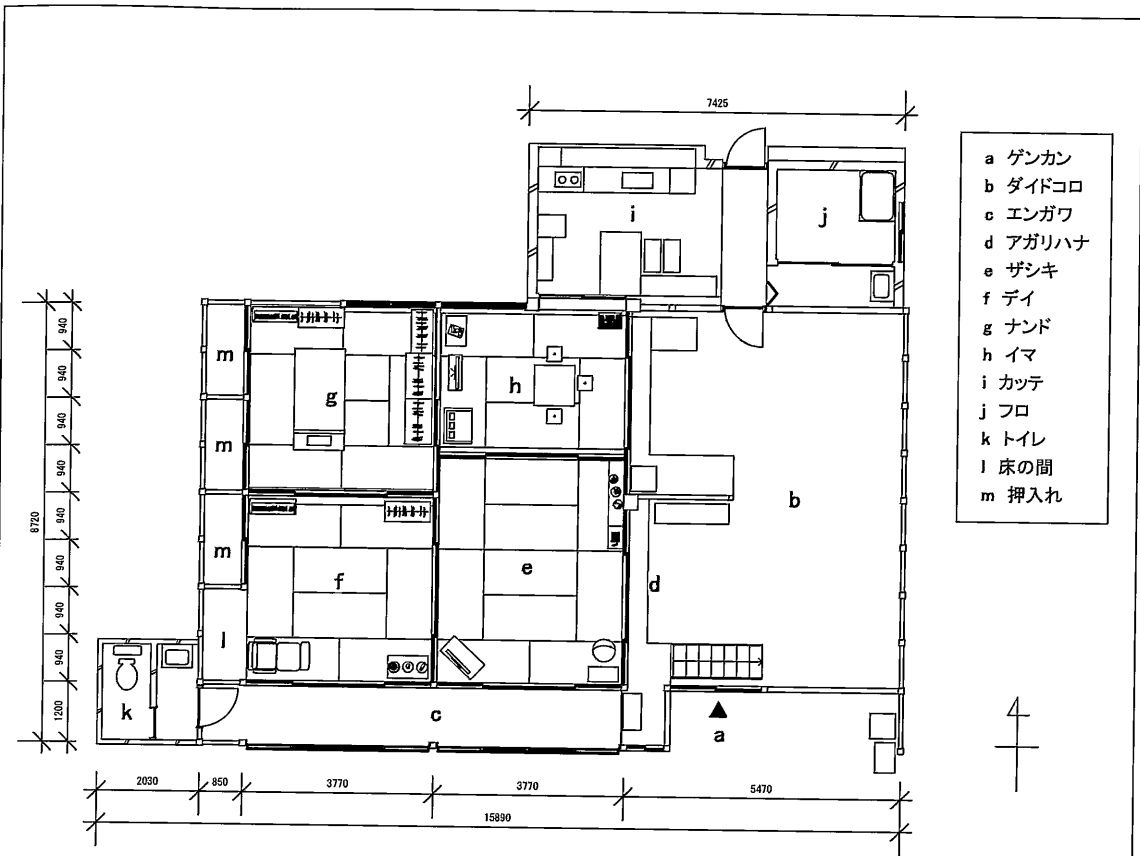
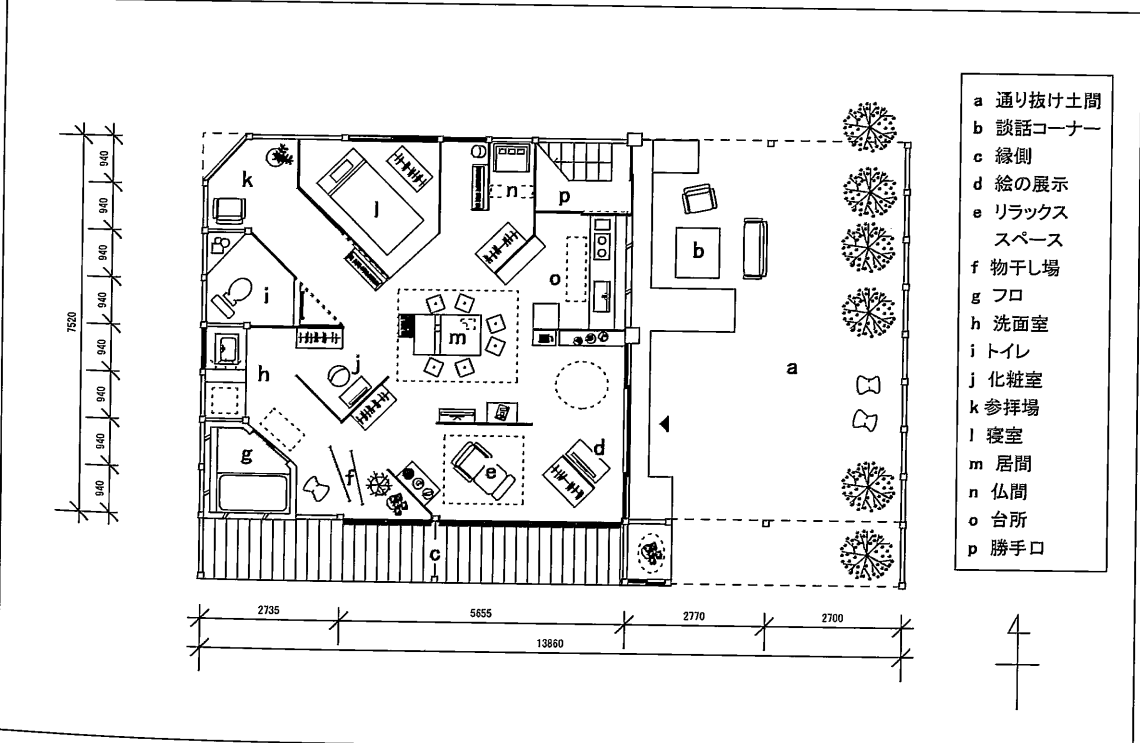


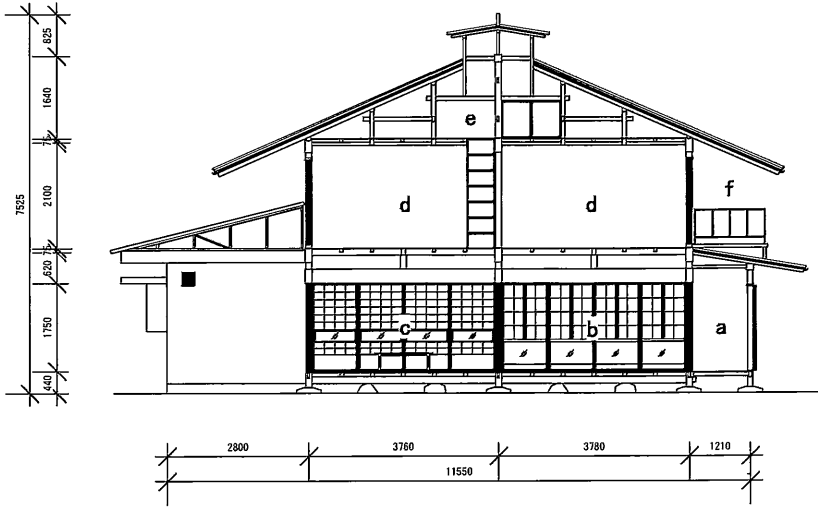
図10 既存家具の保存



改修前 1階平面図 1/150

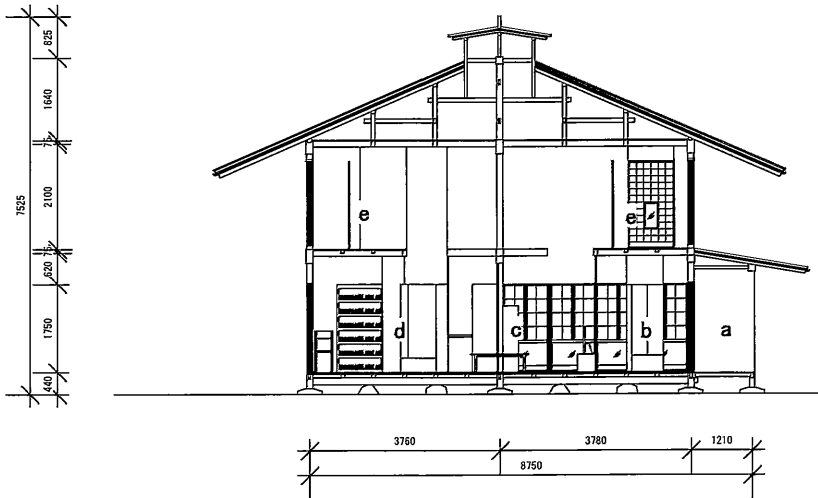


改修後 1階平面図 1/150



- a エンガワ
- b ザシキ
- c イマ
- d 物干し場
- e 収納
- f 縁

改修前 南北断面図 1/150



- a 縁側
- b リラックス
スペース
- c 居間
- d 仏間
- e 予備室

改修後 南北断面図 1/150